注文書



30.4×44.6cm

一、陣取放火之事 一、当手軍勢濫妨狼藉之事 禁制 尼崎本興寺井中

一、伐採竹木之事 処厳科者也、仍執達如件、 右条々於違犯之輩者、速可

永禄十一年九月 日 弾正忠(朱印)

一、陣取放火の事 一、当手軍勢濫妨狼藉の事 尼崎本興寺并びに寺中

一、竹木を伐り採るの事

科に処すべき者也、仍って執達件の如し、 右の条々違犯の輩においては、速かに厳 永禄十一年九月 日 弾正忠 (朱印)

第一卷 本文組見本 60%縮小

43

織田信長禁制

平定の意気込みを示す 政権の所在地である畿内 能寺文書』 「妙顕寺文書」 文書』『若王子神社文書』『離宮八幡宮文書』『八瀬童子会文書』『成就院文書』『大徳寺文書』『本 間に近江、山城、摂津の諸寺社に発給したことが、『沖島共有文書』『永源寺文書』『賀茂別雷神社 人衆を撃破して、三十日には芥川山城(高槻市)に入城した。信長は概ね同様の禁制を、九月の 有名な「天下布武」の 織田信長(一五三四―一五八二)は永禄十一年九月七日に岐阜を出発して、六角義賢や三好三 (ほんこうじもんじょ)

などで確認できる。

B5判 上製本 函入り 定価 本体16、000円+税 ISBN978-4-7924-0979-1 C3321

清文堂史料叢書第125刊

オールカラー118頁

本與寺編

定価

清文堂史料叢書第126刊 A5判 上製本 函入り

本体-1、000円+税 ISBN978479240990-6 C3321 口絵4頁·本文454頁

清文堂出版

〒542-0082 大阪市中央区島之内2丁目8番5号 電話06 (6211) 6265 FAX06 (6211) 6492 ホームページ http://www.seibundo-pb.co.jp メール seibundo@triton.ocn.ne.jp

お名前 TEI

全巻申し込みます

)巻を申し込みます

第一巻

ご住所 =

大阪 清文堂出版





図版(上から)●豊臣秀吉書状●本興寺本堂●細川晴元書状●慶応4年境内図・部分

●本興寺三重宝塔霊廟壇

刊行の辞

大本山本興寺貫首

小西日遶

寺には教学の伝統があり、江戸時代を通じて教学者が輩出した。今日も興隆学林専門学校 と交渉出来る力を持つ信者を擁していたと考えられる。やがてこのような大寺も徳川幕府 を持つに至った。本興寺は三好氏の援助を受けて門前町以外に寺内町を構築し、 港に拠点を設けた布教者でもあった。そして入滅後も弟子達の布教は続けられ、 の学匠であるが、同時に北陸敦賀より京を経て、尼崎・堺・兵庫・牛窓・宇多津といった があって、宗門の僧侶育成の責任を負っている。 よって教学を伝える勧学院が設けられ、布教所の本能寺に対して学問所と定められた本興 の成立で、寺内町の消滅や幕府の宗教政策により政治的な力を失った。しかし日隆聖人に 岸に教線と信者のネットワークが成立し、比翼両輪と言われる京都本能寺と共に大きな力 子島・屋久島・口永良部三島が皆法華となり門流に属したことで、戦国時代には瀬戸内沿 一四二〇)日隆聖人によって開創された。日隆聖人は大部の著述を成した日蓮門下随 本興寺は兵庫県尼崎市に所在する法華宗(本門流)の大本山であり、応永二十七 戦国 南海 め

史や本興寺史、さらには我国の近世仏教史の不明な点が解明されることを期待している。 来た。近世文書については今後も続いて刊行する予定であるが、これによって法華宗宗門 方の御尽力によって、第一巻に中世文書を、第二巻に近世文書の一部を翻刻することが出 れている。今般日隆聖人五百五十遠忌を記念して『本興寺文書』の編纂を発願し、諸先生 開山遠忌の年に本文書が刊行され、聖人の鴻業が広く知られることを喜びとしたい このような本興寺には、中世の武将の禁制・書状類や近世の寺院関係文書が多数所蔵さ



う。 掲載されている。こうした体裁の史料集の刊行が時代の要る史料八十一点が全編カラー写真・読み下し・解説付きで の研 史』・『尼崎市史』などに紹介されて、畿内地域史や寺内町に湊として大いに栄えたので、その関係史料は、『兵庫県 いる証拠である。また本興寺の所在地尼崎は、中世の時代現在の各宗門にあって希有なことで、日隆の素意が生きて師が活動されていることも、承知の通りである。これは、 がれ、その先師として現貫首小西日遶師と学林長大平宏龍 を踏まえて新たに編集され、享徳四年から寛永十八年に至 を残 りがたい限 念として この伝統はいまに本興寺に所在する興隆学林に引き継 ・家康・三成などの禁制や朱印状など著名な人物のも などの歴代のものを始め、細川・三好・ 究に大いに利用されてきた。今回は、最新の研究成果 本興寺を教学道場として整備 の本興寺と日隆 0) いえ、 (したといわれる。 その著述は、 三千余帖に及ぶとい 実に大きい。内容をみると、 知の事実である。日隆は、京都 それだけ尼崎と本興寺が歴史上重要な位 全編カラー写真は限りなく原本に近いもので りである。一点一点の史料を視覚的に学ぶと !が法華宗史上大きな痕跡を残してきた 本興寺の 巻・第 ľ, 山 日隆 二巻が刊 特に教学に大きな足 日 の本能寺を布教道 伊丹 日登 ・日与・ 池田 十遠忌

た 究が重 <u>と</u>且 b た『本能寺史料 中世篇』が刊行されており、併せて検討基礎となろう。本興寺と比翼両輪をなす本能寺にも充実し を参詣したり身近な存在となった。仏縁の賜 ないが、妙本寺の日安と日要の時代に本興寺と緊密な関係 たしは富士門流の安房妙本寺の研究を若干しているに過ぎ することで法華宗研究も一段と深化することであろう。 研究はさらに発展するものと思われる。本史料集は、その 至る学僧を中心とした教学史と一体化することで、本興寺 多様性は、実に興味がつきない。本興寺を支えた僧旦の研 をもって拝見したものである。この署名者とその花押形の ついては、先年本興寺の虫干会(十一月三日)の際 ①永禄十一年の日堯逆修講本尊曼荼羅、②尼崎年寄 . の 0 いであ 2 これ た証 時代の他門との学問上の交流は、現在の想像を超える 那 類ともども現在に伝えられてきたこと自 ていたことを知り、それ以来尼崎を訪 要なことはいうまでもなく、それが日隆から現代に ③元亀二年の本興寺門前百姓等起請文である。 たちの らの うった。改めて本興寺の歴史を学びたい理由であ 『本興寺文書』が座右の書となることは間違 である。ただ幾多の戦乱 なかで、わたしが特に興味を惹かれたの 努力の賜物であったことを忘れては や災害の 物であ なかで日 ねたり本興寺 る。 に感激 衆連署 なるま 3 12 住持 わ

とともに、本興寺をはじめとした関係者のみなさんのご努宗(日蓮宗)の歴史をまなぶひとりとして、喜びにたえない。興寺文書』として刊行され、広く公にされたことは、法華興寺文書』として刊行され、広く公にされたことは、法華

力に心より敬意を表したいと思う。

だけではなく、斯界の研究に関心をよせるものにとっても、のトップランナーとして知られる仁木宏・天野忠幸両氏があたられたことは、法華宗(日蓮宗)の歴史をまなぶものあたられたことは、法華宗(日蓮宗)の歴史をまなぶものあたられたことは、法華宗(日蓮宗)の歴史をまながられることをなったが、その監修に戦国時代の畿内近国史研究

有益な一書となろう。

一巻では、それらの判定が仁木・天野両氏によって、あざ密な考証が要求されるためだが、今回の『本興寺文書』第りしないものも少なくない。それを判定するためには、厳なかったり、あるいはだれがそれを出したのかさえはっきなかったり、あるいはだれがそれを出したのかさえはっきないぎらず、年号が記されていないため年代がはっきりとしかぎらず、年号が記されていないため年代がはっきりとし

な本づくりといわざるをえないであろう。事実の解明も準備されているという点では、周到かつ誠実掲載されており、今後の研究の進展によって、また新たなしかも、各古文書のカラー写真と読みくだしも合わせて

やかになされている。

本年は、本興寺開山である日隆聖人の第五百五十遠忌の本年は、本興寺開山である日隆聖人の第五百五十遠忌の年にもあたる。そのような記念すべきの第六百五十遠忌の年にもあたる。そのような記念すべきかちあいたいと思う。

とは、法華教団史や仏教史の研究者のみならず、 宗派を代表する寺院の未公開史料が体系的に翻刻されるこ 歴史は、中核寺院である本興寺所蔵史料が公開されていな 翻刻のままであった。法華宗本門流の近世から近代に至る 刊行されている。しかしながら、近世史料に関しては、未 類が所蔵されているが、これは既に『法華宗全書』として である。よって、本興寺には開創以来伝えられてきた聖教 れた寺院であり、京都本能寺とともに日隆門流 本山本興寺は、室町時代に活躍した日隆上人によって開か 発展を遂げている。本史料集で紹介する法華宗本門流の大 を継承し、 をみせた。日隆門流をはじめとする各門流は、 蓮聖人の門弟を中心とした門流組織によって教団が拡がり な宗派に日蓮宗、 究者にとってたいへん有り難いことである。 かったことが影響しており、未だ不明な歴史がある。今回、 倉新仏教の宗派を開いた日蓮聖人の系譜を引く代表的 独自の制規を遵守して全国的な教団組織として 法華宗各派がある。これらの宗派は、 門祖 の中核寺院 日本史研 田の教え

ていたことである。これは一般寺院とは異なる寺院組織では、開創以来本能寺と両山一主制がとられ、住持が兼務し近世の本興寺史を構築する上で忘れてはならないこと

たに発見できることが必ずあるはずである。

本興寺の歴史は解明できないことになる。既に本能寺では、本興寺の歴史は解明できないことになる。既に本能寺では、本興寺の歴史は解明できないことになる。既に本能寺では、本興寺の歴史は解明できないことになる。既に本能寺では、本興寺の歴史は解明できないことになる。既に本能寺では、本興寺の歴史は解明できないことに発見できることが必ずあるはずである。

の教団構造やその特徴を読み取ることができる。 の教団構造やその特徴を読み取ることができる。 の教団構造やその特徴を読み取ることができる。 していた住持がいる。例をあげれば身延久遠寺と茂原藻原 していた住持がいる。例をあげれば身延久遠寺と茂原藻原 していた住持がいる。例をあげれば身延久遠寺と茂原藻原 と、法華教団史上に登場する主要寺院の中には二ヵ寺を兼務

は常備の書として推薦する。全国の公立図書館、特に大学図書館や人文系の研究機関に史・仏教史の研究者はもとより、関西地域をはじめとする歴史を知るための史料が含まれている。よって、法華教団歴史を知るための史料が含まれている。よって、法華教団歴史を知るための史料が含まれている。よって、法華教団

『本興寺文書』第二巻が刊行される。近世・近代文書を収載したもので、さらに続刊されるという。既刊の『本能収載したもので、さらに続刊されるという。既刊の『本能収載したもので、さらに続刊されるという。既刊の『本能収載したもので、さらに続刊されるという。既刊の『本能収載した仏教史ないし宗教史全体に益するところも大であるといえよう。言うまでもなく、確固とした個々の宗派の把といえよう。言うまでもなく、確固とした個々の宗派の把といえよう。言うまでもなく、確固とした個々の宗派の把握に立脚してこそ、宗派を超えた全体的・総合的な把握が可能になるからである。

本巻から窺うことのできる論点は、多岐に亘る。まず教本巻から窺うことができる。本能寺に対して、本興寺はいて多くを知ることができる。本能寺に対して、本興寺はいて多くを知ることができる。本まが、のでは、多岐に亘る。まず教

とができる。末寺は、地域的な集中をみながらも広範に分また、末寺やその住僧に関する、多くのデータを知るこ

を は本興寺や塔頭の普請関係史料などからも、諸地域との関係につき多くを知ることができ、都市史研究にも有益の関係につき多くを知ることができ、湖市史研究にも有益の関係につき多くを知ることができ、都市史研究にも有益である。

さらに普請関係史料からは、本興寺が支配の上で尼崎藩のみならず大坂町奉行とも関係を持っていたことが窺え、のみならず大坂町奉行とも関係を持っていたことが窺え、のも含めて、従来は江戸や大坂の事例を中心に論じられてのも含めて、従来は江戸や大坂の事例を中心に論じられてのも含めて、従来は江戸や大坂の事例を中心に論じられてのも含めて、従来は江戸や大坂の事例を中心に論じられていた。

刊も、はや鶴首されるところである。んでおり、私としては蒙を啓かれるところ大であった。続このように瞥見しただけでも多方面に関係する論点を含

解題(天野忠幸)・本興寺の現在・本興寺歴代・第一巻関係年表 織田信長禁制・豊臣秀吉書状・徳川家康禁制など全81点 日隆書状・細川晴元書状・三好長慶禁制・正親町天皇口宣案・

坊普請願につき一札」「本興寺類焼届」ほか)・寺町(「朱印状発給願 ほか)・寺内行事(「年中行事録」「日成上人入院式次第」ほか)・ 口絵・本山末寺(「両本山・塔頭八坊歴代年記」「両本山歴代略記_ 「寺町掟書」ほか) (「本興寺什物帳」「長持道具入帳」ほか)・普請 (「塔頭本宣

寺の末寺 解題(岩城卓二)・本興寺本能

続刊予定・第三巻

平成二十六年刊行予定

監修者

岩城卓二 天野忠幸 京都大学准教授 関西大学非常勤講師

仁木 上野大輔 天理大学研究員 大阪市立大学教授 慶應義塾大学助教

三浦俊明 関西学院大学名誉教授

※五〇音順



監修者の一人として

中期には孫末寺を合わせると二〇〇ヵ寺近くを数える。 置づけられた。末寺は西国を中心として全国に広がり、 寺制をとり、本能寺は布教の道場、本興寺は教学の道場と位 ある。明治四十二年(一九○九)までは京都本能寺と両山一 (一四二〇) 日隆によって開基された法華宗本門流の大本山で 庫県尼崎市に本堂を構える本興寺は、応永二十七

等々、本興寺文書には広く近世・近代史の理解に関わる貴重分離をはじめ明治以降に寺院が直面した諸問題への対応 な証言が記録される。 も多数残されている。寺院で日々執行された行事、末寺の住 町に所在する寺院としての歩みが知られる近世・近現代文書 中世文書を所蔵することでよく知られているが、他にも大本 職決定までの手続き、寺院と幕藩領主・檀家との関係、 山寺院、諸国から僧徒が勉学に訪れた学林、尼崎藩領内の寺 本興寺は細川晴元、三好長慶、織田信長の禁制・書状等の

寺の概要が知られる近世以降の文書を中心に編集され、原文 刊行される運びとなった。第一巻は中世文書、第二巻は本興 者の強い熱意によって、これら文書が『本興寺文書』として が果たせたことに安堵している。 開山日隆聖人五百五十遠忌の年に刊行を開始するという約束 本興寺関係者の歴史研究に対するご理解には敬服しており、 毎回の編集会議・校正作業に同席される貫首をはじめとする 浦俊明氏より協力を求められて刊行に携わることになった。 は尼崎周辺地域の近世・近代史に関心をもつ一人として、三 町から城下町への展開が知られる新出史料も収録される。私 書閲覧の機会が限られている中世文書は写真を掲載し、寺内 このたび、歴史研究の発展に寄与したいという本興寺関係

でなく、さまざまな分野の研究者に活用していただきたい。 『本興寺文書』は順次刊行される予定である。宗教史だけ